國學院大學学術情報リポジトリ

『漢書』古今人表の「表」としての効果と制作意図：『論語』及び律暦志・藝文志との関係を中心に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 長谷川, 清貴, Hasegawa, Kiyotaka
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000655

『漢書』古今人表の「表」としての効果と制作意図

——『論語』及び律暦志・藝文志との関係を中心に

長谷川清貴

○はじめに

『漢書』古今人表は、上古から秦末に至る総計一九四〇名の人物を九等に評価分類して一望せしめるという、『史記』にはない独自の表であり、後世の注目を惹くと同時に多くの批判を生じた篇である。所載人物の配等（等級の配置）の不適切や、誤脱・重複を指摘したり、班固の関与の度合を疑ったりする説が唱えられる一方で、古今人表の特徴や意義を考察し、人物を考証する研究も行われ、現在も様々な論を生んでいる。本論考は、古今人表をめぐる諸問題を整理した上で、数多の人名を図示することで現れる「群」がもたらす効果を述べ、古今人表が示す意図を新たに指摘することを目指す。

第一章　古今人表をめぐる諸問題

1、唐代の批判

古今人表（以降、人表と称する）については、まず唐人によって多くの問題点が指摘されている。張晏は甚だ不適な列次として八名を例示し、諸子の書を博捜して数千年に亘る人物を列す

るという事業が、班固が竇憲に坐して獄死したために未完に終わったと断じ[1]、顔師古も、人表に録する人物が古人のみで、今人たる漢人が載せられていないことから、同様に未畢との見解を示している[2]（ともに漢書注）。また、劉知幾は『史通』で、再三にわたって人表の非を痛烈に難じている。その批判の概要は次の通り。

甲、もともと表とは、紀や伝があれば事足りる重複・煩雑せるものだが、中でも人表は無用の表であり、しかも漢事を言わぬのは漢書中の疣贅（いぼ）である。（内篇、表暦第七）

乙、人表冒頭の論は格調高いが、篇中の人物列次には難点が多く、是非善悪を乱している。（内篇、品藻第二十三）

丙、班固が竇氏の事に坐して獄死し、書は散乱して整理がついていなかった。妹の曹大家（班昭）が馬融等十人に読を授けつつ後を継いたが、なお八表や天文志は完成せず、馬続の手によって完成した。そして、人表は尤も本書に類していない。（外篇、古今正史第二）

丁、人表はただ賢愚を品藻し善悪を激揚することを目的とするが、表は国家や禄位などの区切りもない上に、境界や行を重ねて細かい字で書き連ねられ、他表に類していない[3]。人を古今に列するのであれば、表では限界があり、志として、上上より等級ごとに順に記し、標榜科条を明示して、各篇末尾を「右若干品、凡て若干人」とするべきである。（外篇、雑説上第七）

要するに、劉知幾は人表が基準を示さず、乱雑無秩序に人物を配しているのを嫌悪し、『漢書』表中でも異質のものとして、制作者や完成度を疑い、改善方法まで指摘している。以降、宋代の晁公武『郡齋讀書志』や鄭樵『通志』、明代の楊慎『升庵集』など、人表に言及するものは批判が多い。

2、清代の考証

清代に入ると、人表は一定の評価を与えられ、大いに考証が行われた。まず、馬驌は上古から秦末までの資料を紀事本末形式で再編し論断を加えた大著『繹史』百六十巻の末尾に古今人表を選び、『漢書』をそのまま録しながら、表の人物配置に工夫を加えて明快にし、必要な考証を追加して示した。人物考証を中心としたものには、夏燮『校漢書八表』、梁玉繩『漢書人表考（人表考）』、蔡雲『漢書人表考校補』、翟云升『校正古今人表』、孫國仁『漢書人表略校』があり、いずれも『史記漢書

諸表訂補十種』（中華書局、一九八二年）に収められている。梁氏・翟氏の著は全人物を載せるが、表形式を廃して等級ごとに列している。また、錢大昕『二十二史考異』や趙翼『廿二史箚記』等、多くの諸家の筆記がこれに言及している。現代、王利器・王貞岷両氏の『漢書古今人表疏證』（斉魯書社、一九八八年）は、人物ごとにこれらの説を集釈して便利である。

3、主要論点と研究史

梁玉繩は『人表考』序で、はじめに人表を「創例」と断じた上で、

> 案敍傳曰、篇章博擧、通于上下、略差名號、九品之序。述古今人表第八。是科段並出固手、昭特覆更綴輯爾。……褒貶進退、史官之職。始三皇、以迄嬴秦、聖仁智愚、不勝指數。馬遷既未能盡錄。班氏廣徵典籍、蒐列將及二千人、存其大都、彰善戒惡、準古鑒今。非苟作者。（案ずるに叙伝に曰はく、「篇章 博挙し、上下を通じ、略ぼ名号を差して、九品の序あらしむ。古今人表第八を述ぶ」と。是れ科段（評価科目の設定と人物の配等）は並びに固の手に出で、昭（班昭）は特だ覆更綴輯せるのみ。……褒貶進退は、史官の職（つと）めなり。三皇より始まり、以て嬴秦に迄ぶまで、聖仁智愚、指数するに勝へず。馬遷既に未だ尽く録する能はず。班氏広く典籍を徴し、蒐め列すること将に二千人に及ばんとし、其の大都を存して、善を彰はし悪を戒め、古に準じて今を鑑みしむ。苟（かりそめ）の作者に非ず。）

と、叙伝の記述内容と、人物を博捜し、勧懲鑑今を目した人表の業は班昭や馬続ら後継者には成しがたいとして、人表の大要は班固が制作したものと主張する。梁氏はさらに、

> 錢宮詹嘗謂余云、此表用章儒學、有功名教。觀其尊仲尼于上聖、顏・閔・思・孟子大賢、弟子居上者三十餘人。而老・墨・莊・列諸家、咸置中等。書首祖述夫子之言、論語中人物悉見于表。而他書則有去取。詳列孔子譜系、儼以統緒屬之。孟堅具此特識、故卓然爲史家之宗。不獨文章雄跨百代而已。余甚服膺斯語。（錢宮詹 嘗て余に謂ひて云はく、「此の表は用て儒学を章（あら）はし、名教に功有り。観るに其れ仲尼を上聖に尊び、顔・閔・思（子思）・孟子を大賢とし、弟子の上に居る者三十余人なり。而して老・墨・莊・列諸家は、咸な中等に置く。書 首めに夫子の言を祖述し、論語

中の人物 悉く表に見ゆ。而るに他書は則ち去取する有り。詳らかに孔子の譜系を列し、儼しんで統緒を以て之を属す。孟堅は此の特識を具へ、故に卓然として史家の宗と為る。独り文章 百代に雄跨するのみならず」と。余甚だ斯の語を服膺す。）

と、銭宮詹の語を引いて、人表の功績を、儒学、特に孔子の学統の宣揚にあるとする。一方で、人物の配等については、

惟是定以三科、區分尚易、別以九品、確當爲難。毫釐之差、誠所不免。而屢經傳寫、紊脱尤多。元序有崇侯、張晏謂有嫪毐、宋重脩廣韻公字注有齊大夫公幹、士字注有士思癸、通志氏族略四有司褐拘、而今俱無之。斯疏脱之譌也。元序桀爲下愚、學林引表亦在九等、張晏謂田單・魯仲連・藺相如第五、寺人孟子第三、史通謂、陽處父第四、士會・高漸離第五、鄧三甥・荊軻第六、鄧祁侯・秦舞陽第七、俱與今異。斯紊次之譌也。他若標署譌複、時代乖違、均由乎此。（惟ふに是れ定むるに三科（上・中・下等）を以てせば、区分尚ほ易きも、別つに九品を以てすれば、確当すること難しと為す。毫釐の差、誠に免れざる所なり。而るに屢しば伝写を経て、紊脱尤も多し。元序に崇侯（崇侯虎）有り、張晏謂ふに嫪毐有り、宋『重脩廣韻』「公」字の注に斉大夫公幹有り、「士」字の注に士思癸有り、『通志』氏族略四に司褐拘有り、而るに今俱に之れ無し。斯れ疏脱の譌なり。元序に桀を下愚と為し、『学林』引表にも亦た九等に在り（現行本では第八等。以下括弧内は現行本での等級）、張晏謂ふに田単・魯仲連・藺相如は第五（田は第四等、魯・藺は第二等）、寺人孟子は第三（第四等）、『史通』謂ふに、陽処父は第四（第三等）、士会・高漸離は第五（それぞれ第四等、第五等）、鄧の三甥・荊軻は第六（四部叢刊本・『史通通釋』の原注はそれぞれ第六等、第五等とする）、鄧祁侯・秦舞陽は第七（ともに第六等）、俱に今と異なる。斯れ次を紊せるの譌なり。他の標署譌複し、時代乖違するが若きは、均しく此に由る。）

と、九等に分かつ難しさと、伝写の繰り返しによる人物の配等の乱れや脱落、重複の多さを指摘している。梁氏の序での指摘は、人表に載せる人物すべての考証を経て為されたものであり、尊重すべきであろう。

現代の人表についての研究は、わが国では専一的になされた

ものが少ない。吉本道雅氏は、人表の総合的理解は、人物の評価を表す等級だけでなく、従来殆ど顧慮されることのなかった行（活動時期）も考慮しなければならないと主張し、春秋期の各国諸侯や『左傳』主要事件の登場人物を中心に検討して、多くの不適切な配置を指摘する。そして、人表の制作背景に、一群の人物の羅列から関連する文献の記述を想起できるだけの「古典的教養の浸透」があり、その目的を「上古～秦の歴史を暗喩的に「記述」することで、『史記』の超克を試みたものに他ならない」とする。[4] また、渡邉義浩氏は、人表を、「董仲舒學派の性三品説に基づき人物を九等に分類」したものであるとする。[5]

人表についての専一研究は、中国で盛んである（最後に主要研究一覧を附す）。諸研究の多くは基本的に、人表の全部または概要を班固自身が制作した立場をとり、その特徴を論じている。例えば丁毅華氏は、人表を、今を詳説し古を略説する『史記』の欠を補うべく班固が設計し、漢以前の歴史を研究した末にできあがった人物資料の結晶であるとし、人物の選択と位列の特色として、尊卑貴賤にとらわれない点、当時の男尊女卑の風潮の中で比較的女性へも評価を与えている点、聖賢の師を高く評する点、尊孔崇儒を挙げ、また、『白虎通』では強烈な神学傾向が表れているが、人表では、神・人の別がないと指摘する。[6] また王緒福氏は、人表に載せる人物を帝王、諸侯、列女、逸民、諸子文学の視点から考察した上で、人表の人物重視の立場と、『列女傳』『説苑』『新序』に見える人物の位列が、劉向の相応したものになっていることから、班固が劉向の折衷主義（天人感応・君権神授に代表される神秘主義と人為を重んじる道徳主義との折衷）を継承した現れであるとする。

本論考は、「多くの篇章から人物を採り、古今を通じ、九等に次第して示した」という叙伝の記載から、班固が人表をこの主旨のもと設計して、『漢書』全体の構成に加えた点までを確実なものとして、人表を概観して読み取れる点を抽出していく。但し、人物には位列の錯誤や重複、脱落が疑われるため、特定個人の位列から速断することは避けつつ、以下に論じる。

第二章　孔門の描写と『論語』の影響

人表は、他の七表と同じく、表に先立って序を掲げて主旨を述べている（以下元序と称する）。全文を挙げる。

自書契之作、先民可得而聞者、經傳所稱、唐虞以上、帝王

有號謚。輔佐不可得而稱矣、而諸子頗言之。雖不考虞孔氏、然猶著在篇籍、歸乎顯善昭惡、勸戒後人。故博采焉。孔子曰、若聖與仁、則吾豈敢。又曰、何事於仁、必也聖乎。未知、焉得仁。生而知之者、上也。學而知之者、次也。困而學之、又其次也。困而不學、民斯爲下矣。又曰、中人以上、可以語上也。唯上智與下愚不移。傳曰、譬如堯・舜・禹・稷・**卨**、與之爲善則行、鯀・讙兜欲與爲惡則誅。可與爲善、不可與爲惡、是謂上智。桀・紂、龍逄・比干欲與之爲善則誅、于莘・崇侯與之爲惡則行。可與爲惡、不可與爲善、是謂下愚。齊桓公、管仲相之則霸、豎貂輔之則亂。可與爲善、可與爲惡、是謂中人。因茲以列九等之序、究極經傳、繼世相次、總備古今之略要云。

（書契の作られしより、先民の得て聞くべき者は、経・伝に称せらる所にして、唐虞以上、帝王号謚有り。輔佐せしものは得て称するべからざるも、諸子頗る之を言へり。孔氏に考へずと雖も、然れども猶ほ著されて篇籍に在り。善を顕はし悪を昭らかにし、後人を勧戒するに帰す。故に博く焉を采る。【第一段】

孔子曰はく、「聖と仁との若きは、則ち吾れ豈に敢へてせん。」（現行『論語』述而）又曰はく、「何ぞ仁を事とせん、必ずや聖か。」（同、雍也）「未だ知ならざるに、焉くんぞ仁なるを得ん。」（同、公冶長）「生れながらにして之を知る者は、上なり。学びて之を知る者は、次なり。困じて之を学ぶは、又其の次なり。困じて学ばざる、民斯を下と為す。」（同、季氏）又曰はく、「中人以上は、以て上を語るべきなり。」（同、雍也）「唯だ上智と下愚とは移らず。」（同、陽貨）【第二段】

伝に曰はく、譬へば堯・舜の若きは、禹・稷・**卨**（せつ）之と与に善を為せば則ち行はれ、鯀・讙兜 与に悪を為さんと欲すれば則ち誅せらる。与に善を為すべく、与に悪を為すべからざる、是れ上智と謂ふ。桀・紂は、龍逄・比干 之と与に善を為さんと欲すれば則ち誅せられ、于莘・崇侯之と与に悪を為せば則ち行はる。与に悪を為すべく、与に善を為すべからざる、是れ下愚と謂ふ。斉の桓公は、管仲之に相たれば則ち覇たり、豎貂 之を輔くれば則ち乱る。与に善を為すべく、与に悪を為すべき、是れ中人と謂ふ。因りて茲に以て九等の序を列し、経・伝を究極して、世を継ぎて相ひ次し、古今の略要を総備せりと云ふ。【第三段】）

元序は三段に大別できる。第一段では帝王と輔佐の臣を諸書

より博採し、善悪を明らかにして後世を勧戒するという本表の目的を示し、第二段では孔子言を引いて上・中・下、聖・仁・知（智）という等級の根拠を示し、第三段では伝（経義の解説）を引いて、人物の上中下の基準を、君主の善悪と、それが輔佐の臣の賢邪に左右されるか否かとして定めている。孔子言はいずれも『論語』に見える。人表において目を引くものの一つが、孔子門下や『論語』登場人物の多さであり、四つの視点で図示してみた。

別表1は、人表に見える孔子門下の一覧である。[7] 孔子の弟子であるかの基準は、34「琴牢」を除いて、『史記』仲尼弟子列傳に登場する弟子とし、「琴牢」については、『論語』子罕七章[8]に見える「牢」が該当すると見なし、集解の引く鄭玄説が弟子とするのに従った。最初に掲げる十名は、言うまでもなく先進三章に挙げられる十哲で、表記・順序も同じ。徳行の四名を第二等（上中・仁人）、他三科の六名を第三等（上下・智人）とする。以下の二十五名は、第四等の四人を除いてすべて第三等で、門人の大半は上に属する。**別表2**は、人表と仲尼弟子列傳との関係を記したものである。司馬遷が「年齢が知られて名もあり、孔子から業を受けて書伝に見える」者とした公孫龍（子石）までの三十五名中、三十一名が掲載され、「年齢不明で、事績も書伝に見えない」四十二名からも二名が採られて、人表が、事績がわかり配等できる孔子の弟子を極力録したことが窺える。但し、別表1・2を対照すると、弟子の配置順については、孔子との年齢差や、仲尼弟子列傳での掲載順との関連は見えない。

また、**別表3・4**は、弟子以外の孔子をとりまく関係者を、『史記』孔子世家と『論語』から抽出したものである。[9] 君主や卿大夫はもちろん、別表「達巷党の人」「匡人」「蕢を荷ひて孔氏の門を過ぐる者」といった個人を特定できない者や、「闕党の童子」に至るまで、人表には大半の登場人物が拾われ、配等されていることがわかる。また、孔子世家に載せる孔子の子孫たちも、子思のほかに孔穿・孔鮒・孔襄が掲載され、最後の孔襄は孔子世家に「嘗て孝恵皇帝の博士と為り、遷りて長沙太守と為る」と記すため、人表中唯一の漢人であると言える。

別表１　『漢書』古今人表所載の孔子門下

No.	人物（人表表記）	孔子年少	位列	百衲本配置	備考
0	仲尼	—	第一等	27b09	
1	宰我		第三等	27b11	十哲（言語）
2	子貢	－31	第三等	27b13	十哲（言語）
3	顔淵	－30	第二等	27b15	十哲（德行）
4	冉有	－29	第三等	27b15	十哲（政事）
5	閔子騫	－15	第二等	28a02	十哲（德行）
6	季路	－ 9	第三等	28a02	十哲（政事）
7	子游	－45	第三等	28a04	十哲（文學）
8	冉伯牛		第二等	28a05	十哲（德行）
9	子夏	－44	第三等	28a06	十哲（文學）
10	仲弓		第二等	28a08	十哲（德行）
11	曾子	－46	第三等	28a08	
12	子張	－48	第三等	28a10	
13	曾晳		第三等	28a12	
14	子賤	－30	第三等	28a14	
15	南容		第三等	28b01	
16	公冶長		第三等	28b04	
17	公西華		第三等	28b06	
18	有若		第三等	28b08	
19	漆雕啓		第三等	28b09	
20	澹臺滅明	－39	第三等	28b11	
21	樊遲	－36	第三等	28b15	
22	巫馬期	－30	第三等	29a01	
23	司馬牛		第三等	29a03	
24	子羔	－30	第三等	29a05	
25	公伯寮		第四等	29a06	
26	原憲		第三等	29a06	
27	顔路		第三等	29a07	
28	公肩子		第四等	29a07	
29	商瞿	－29	第三等	29a08	
30	季次		第三等	29a10	
31	子石		第四等	29a10	
32	公良		第三等	29a11	
33	顔刻		第三等	29a14	
34	(琴牢)		第四等	29a14	
35	顔柳		第三等	33b5	

※「孔子年少」は、『史記』仲尼弟子列傳が記す、孔子との年齢差。
※「百衲本配置」の記号は葉—行（半葉あたり15行）を示す。
　例えば仲尼の「27b09」は、27葉裏９行目の意。

別表２　『史記』仲尼弟子列傳所載の孔子門下と人表掲載

No.	人物	孔子年少	人表No.	人表表記	位列	百衲本配置	論語	備考
0	仲尼	—	0	仲尼	第一等	27b09	○	
1	顏回（子淵）	－30	3	顏淵	第二等	27b15	○	
2	閔損（子騫）	－15	5	閔子騫	第二等	28a02	○	
3	冉耕（伯牛）		8	冉伯牛	第二等	28a05	○	
4	冉雍（仲弓）		10	仲弓	第二等	28a08	○	
5	冉求（子有）	－29	4	冉有	第三等	27b15	○	
6	仲由（子路）	－9	6	季路	第三等	28a02	○	
7	宰予（子我）		1	宰我	第三等	27b11	○	
8	端木賜（子貢）	－31	2	子貢	第三等	27b13	○	
9	言偃（子游）	－45	7	子游	第三等	28a04	○	
10	卜商（子夏）	－44	9	子夏	第三等	28a06	○	
11	顓孫師（子張）	－48	12	子張	第三等	28a10	○	
12	曾參（子輿）	－46	11	曾子	第三等	28a08	○	
13	澹臺滅明（子羽）	－39	20	澹臺滅明	第三等	28b11	○	
14	宓子齊（子賤）	－30	14	子賤	第三等	28a14	○	
15	原憲（子思）		26	原憲	第三等	29a06	○	
16	公冶長（子長）		16	公冶長	第三等	28b04	○	
17	南宮括（子容）		15	南容	第三等	28b01	○	
18	公晳哀（季次）		30	季次	第三等	29a10	×	
19	曾蒧（晳）		13	曾晳	第三等	28a12	○	
20	顏無繇（路）		27	顏路	第三等	29a07	○	
21	商瞿（子木）	－29	29	商瞿	第三等	29a08	×	
22	高柴（子羔）	－30	24	子羔	第三等	29a05	○	
23	漆雕開（子開）		19	漆雕啓	第三等	28b09	○	
24	公伯繚（子周）		25	公伯寮	第四等	29a06	○	
25	司馬耕（子牛）		23	司馬牛	第三等	29a03	○	
26	樊須（子遲）	－36	21	樊遲	第三等	28b15	○	
27	有若	－43	18	有若	第三等	28b08	○	
28	公西赤（子華）	－42	17	公西華	第三等	28b06	○	
29	巫馬施（子旗）	－30	22	巫馬期	第三等	29a01	○	
30	梁鱣（叔魚）	－29	－	-	-	-	×	
31	顏幸（子柳）	－46	35	顏柳	第三等	33b5	×	※『禮記』檀弓下に記述あり
32	冉孺（子魯）	－50	－	-	-	-	×	
33	曹卹（子循）	－50	－	-	-	-	×	
34	伯虔（子析）	－50	－	-	-	-	×	
35	公孫龍（子石）	－53	31	子石	第四等	29a10	×	※『説苑』難言に記述あり
36	冉季（子產）		－	-	-	-	×	
37	公祖句茲（子之）		－	-	-	-	×	
38	秦祖（子南）		－	-	-	-	×	
39	漆雕哆（子斂）		－	-	-	-	×	
40	顏高（子驕）		－	-	-	-	×	
41	漆雕徒父		－	-	-	-	×	
42	壤駟赤（子徒）		－	-	-	-	×	
43	商澤		－	-	-	-	×	
44	石作蜀（子明）		－	-	-	-	×	
45	任不齊（選）		－	-	-	-	×	
46	公良孺（子正）		32	公良	第三等	29a11	×	※孔子世家に記述あり
47	后處（子裏）		－	-	-	-	×	

別表２　『史記』仲尼弟子列傳所載の孔子門下と人表掲載（続き）

No.	人物	孔子年少	人表No.	人表表記	位列	百納本配置	論語	備考
48	秦冉（開）		−	-	-	-	×	
49	公夏首（乘）		−	-	-	-	×	
50	奚容箴（子晳）		−	-	-	-	×	
51	公肩定（子中）		28	公肩子	第四等	29a07	×	※『春秋繁露』兪序に記述あり
52	顔祖（襄）		−	-	-	-	×	
53	**鄡**單（子家）		−	-	-	-	×	
54	句井疆		−	-	-	-	×	
55	罕父黑（子索）		−	-	-	-	×	
56	秦商（子丕）		−	-	-	-	×	
57	申黨（周）		−	-	-	-	×	
58	顔之仆（叔）		−	-	-	-	×	
59	榮旂（子祈）		−	-	-	-	×	
60	縣成（子祺）		−	-	-	-	×	
61	左人郢（行）		−	-	-	-	×	
62	燕伋（思）		−	-	-	-	×	
63	鄭國（子徒）		−	-	-	-	×	
64	秦非（子之）		−	-	-	-	×	
65	施之常（子恆）		−	-	-	-	×	
66	顔噲（子聲）		−	-	-	-	×	
67	步叔乘（子車）		−	-	-	-	×	
68	原亢籍		−	-	-	-	×	
69	樂欬（子聲）		−	-	-	-	×	
70	廉絜（庸）		−	-	-	-	×	
71	叔仲會（子期）		−	-	-	-	×	
72	顔何（冉）		−	-	-	-	×	
73	狄黑（晳）		−	-	-	-	×	
74	邦巽（子斂）		−	-	-	-	×	
75	孔忠		−	-	-	-	×	
76	公西輿如（子上）		−	-	-	-	×	
77	公西蔵（子上）		−	-	-	-	×	

※「人物」には仲尼弟子列傳所載の姓名、括弧内に字を記し、「人表表記」と比較できるようにした。
※「人表No.」は別表１での番号、「論語」は、『論語』掲載の有無を示す。

別表３　『史記』孔子世家所載の人物と人表掲載（仲尼弟子列傳所載弟子以外）

No.	人物	人表表記	等級	百衲本配置	論語	備考
1	孔防叔	宋方叔	第三等	23a15	×	
2	伯夏	宋伯夏	第四等	23b09	×	
3	叔梁紇		第六等	26a04	×	
4	顔氏女	—	—	—	×	
5	孟釐子	孟釐子	第四等	28a14	○	
6	（孟）懿子	孟懿子	第四等	28b02	○	
7	南宮敬叔	南宮敬叔	第四等	28b04	○	
8	老子	老子	第四等	28b09	×	
9	齊景公	齊景公杵臼	第六等	28b13	○	
10	晏嬰	晏平仲	第二等	27b06	○	
11	公山不狃	公山不狃	第八等	33b04	○	
12	少正卯	—	—	—	×	
13	師已	魯師已	第五等	29b12	×	※師己（第四等33a14）もあり
14	顔濁鄒	顔燭雛	第五等	31a09	×	
15	顔刻	顔刻	第三等	29a14	×	
16	蘧伯玉	蘧伯玉	第二等	27a15	○	
17	南子	南子	第九等	30a12	○	
18	桓魋	宋桓魋	第七等	33b05	○	
19	司城貞子	陳司城貞子	第五等	31a06	×	
20	公良孺	公良	第三等	29a11	×	
21	衛靈公	衛靈公元	第九等	30a09	○	
22	佛肸	弗肸	第八等	33a15	○	
23	荷蕢而過門者	何蕢	第四等	33a01	○	
24	師襄子	師襄子	第四等	33a09	×	
25	季桓子	季桓子	第九等	30b13	○	
26	季康子	季康子	第六等	33b13	○	
27	公之魚	公之魚	第七等	33b01	×	
28	葉公	葉公子高	第三等	32a09	○	
29	長沮	長沮	第四等	32b09	○	
30	桀溺	桀溺	第四等	32b12	○	
31	荷蓧丈人	丈人	第四等	32b14	○	
32	楚令尹子西	楚子西	第四等	30a03	×	
33	楚狂接輿	楚狂接輿	第四等	33a04	○	
34	太宰嚭	太宰嚭	第九等	34a01	○	
35	魯大師	魯太師	第五等	32b04	○	
36	達巷黨人	達巷黨人	第三等	32b08	○	
37	牢	（琴牢）	第四等	29a14	○	
38	（孔）鯉（伯魚）	—	—	—	○	馬驌「伯魚宜しく載すべし。」
39	（孔）伋（子思）	子思	第二等	35b07	×	
40	（孔）白（子上）	—	—	—	×	
41	（孔）求（子家）	—	—	—	×	
42	（孔）箕（子京）	—	—	—	×	
43	（孔）穿（子高）	孔穿	第四等	39a01	×	子思玄孫
44	子愼	—	—	—	×	
45	（孔）鮒	孔鮒	第五等	40b04	×	孔穿孫
46	孔襄	孔襄	第三等	40b05	×	孔鮒弟子。惠帝の博士

別表４　『論語』登場人物と人表掲載（『史記』仲尼弟子列傳所載以外）

No.	人物	初出	人表表記	等級	百衲本配置	備考
1	陳亢（子禽）	學而10	陳亢	第五等	32b09	※別に陳子禽（第四等33a06）・陳子亢（第六等33a15）有り
2	孟懿子	爲政５	孟懿子	第四等	28b02	
3	孟武伯	爲政６	—	—	—	
4	哀公	爲政19	魯哀公	第七等	31b14	
5	季康子	爲政20	季康子	第六等	30b13	
6	林放	八佾４	林放	第五等	32b15	
7	王孫賈	八佾13	王孫賈	第四等	30b07	
8	定公	八佾19	魯定公	第八等	30a15	
9	※管仲	八佾22	管仲	第二等	-	※百衲本に見えず、中華書局点校本二十四史に拠る
10	魯大師	八佾23	魯太師	第五等	32b04	
11	儀封人	八佾24	儀封人	第四等	32b06	
12	申棖	公冶長11	申棖	第五等	33a13	
13	※孔文子（孔圉）	公冶長15	中叔圉※	第四等	30b02	※梁玉繩による。錢大昕は「孔文子（第七等32b01）」を仲叔圉のこととする
14	※子產（公孫僑）	公冶長16	鄭子產	第二等	27b04	
15	※晏平仲（晏嬰）	公冶長17	晏平仲	第二等	27b06	
16	※臧文仲	公冶長18	（臧文仲）※	（第三等）	27b08	※配置時期が合わず、馬驌・錢大昕・梁玉繩ともに臧武仲のこととする
17	※令尹子文	公冶長19	令尹子文	第三等	23b14	
18	※季文子	公冶長20	魯季文子	第三等	27a02	
19	※甯武子	公冶長21	甯武子	第二等	22a15	
20	※伯夷	公冶長23	伯夷	第二等	11b06	※逸民
21	※叔齊	公冶長23	叔齊	第二等	11b07	※逸民
22	※微生高	公冶長24	—	—	—	
23	※左丘明	公冶長25	左丘明	第二等	27b12	
24	※子桑伯子	雍也２	子桑子※	第五等	37a05	※時期がそぐわない指摘複数
25	※孟之反	雍也15	孟之反	第三等	33a09	
26	※祝鮀	雍也16	祝佗	第四等	30b04	
27	※宋朝	雍也16	宋朝	第九等	30b02	
28	南子	雍也28	南子	第九等	30a12	
29	※堯	雍也30	陶唐氏※	第一等	06a07	※百衲本は「帝堯陶唐氏」。点校本校勘記は他本により補う
30	※舜	雍也30	帝舜有虞氏	第一等	07b02	
31	※老彭	述而１	老彭	第三等	09b04	
32	※周公（周公旦）	述而５	周公	第一等	13a14	
33	※衛君（出公輒）	述而14	衛出公輒	第八等	32b01	
34	葉公（子高）	述而18	葉公子高	第三等	32a10	
35	※桓魋	述而22	宋桓魋	第七等	33b05	
36	互鄉の童子	述而28	互鄉童子	第八等	33a12	
37	陳司敗	述而30	陳司敗	第五等	33a04	
38	※泰伯	泰伯１	太伯	第二等	11a08	
39	孟敬子	泰伯４	—	—	—	
40	※師摯	泰伯15	太師摯	第三等	11b08	※魯太師（第五等32b04）と太師摯との可能性あり
41	※禹	泰伯18	帝禹夏后氏	第一等	08a04	
42	※武王（周武王）	泰伯20	武王	第一等	12a11	
43	達巷黨人	子罕２	達巷黨人	第三等	32b08	
44	匡人	子罕５	匡人	第七等	33b08	

別表４　『論語』登場人物と人表掲載（『史記』仲尼弟子列傳所載以外）（続き）

No.	人物	初出	人表表記	等級	百衲本配置	備考
45	太宰	子罕６	太宰嚭※	第九等	34a01	※唐寫本鄭氏注「太宰、吳大夫、名嚭。」集解「孔安國曰、太宰、大夫官名也。或吳或宋、未可分也。」
46	牢	子罕７	（琴牢）	第四等	29a14	
47	鯉（伯魚）	先進８	—	—	—	
48	季子然	先進24	—	—	—	
49	棘子成（棘子城）	顔淵８	革子戚	第七等	33a04	
50	齊景公	顔淵11	齊景公杵臼	第六等	28b13	
51	※衛公子荊	子路８	衛公子荊	第四等	27b02	※鄭注は南宮敬叔（第四等28b04）のこととする
52	南宮适	憲問６	南宮适	第二等	12b04	
53	※卑諶	憲問９	鄭卑諶	第四等	27b09	※梁玉繩・翟云升、世叔に比定す
54	※世叔	憲問９	子大叔	第四等	28a02	
55	※行人子羽	憲問９	行人子羽	第四等	27b13	
56	※子西	憲問10	楚子西	第四等	30a03	
57	※孟公綽	憲問12	—	—	—	
58	※臧武仲	憲問13	臧文仲※	第三等	27b08	※No.16臧文仲を参照
59	※卞莊子	憲問13	卞嚴子	第三等	27b05	
60	※公叔文子	憲問14	公叔文子	第四等	30a14	
61	公明賈	憲問14	公明賈	第五等	32b07	
62	※晉文公	憲問16	晉文公	第四等	22a14	
63	※齊桓公	憲問16	齊桓公小白	第五等	19b15	
64	※大夫僎	憲問19	大夫選	第五等	31a04	
65	衛靈公	憲問20	衛靈公元	第九等	30a09	
66	陳恆（陳成子）	憲問22	田恆	第八等	32a07	
67	蘧伯玉	憲問26	蘧伯玉	第二等	923	
68	微生畝	憲問34	—	—	—	
69	子服景伯	憲問38	子服景伯	第五等	32b12	
70	荷蕢而過孔氏之門者	憲問41	何蕢	第四等	33a01	
71	高宗（殷武丁）	憲問42	武丁	第二等	10b12	
72	原壤	憲問45	原壤	第八等	33a01	
73	闕黨童子	憲問46	厥黨童子	第七等	32b15	
74	※史魚（史鰌）	衛靈公７	史魚	第四等	30b12	
75	柳下惠（展禽）	衛靈公14	—	—	—	※逸民。馬驌は「當在仁智之列」とする
76	師冕	衛靈公42	師冕	第五等	33a14	
77	※周任	季氏１	周任	第三等	12b05	
78	陽貨（陽虎）	陽貨１	陽虎	第九等	33a08	
79	公山不擾	陽貨５	公山不狃	第八等	33b04	
80	佛肸	陽貨７	茀肸	第八等	33a15	
81	孺悲	陽貨20	—	—	—	
82	※微子	微子１	微子	第二等	11b01	※殷の三仁
83	※箕子	微子１	箕子	第二等	11b02	※殷の三仁
84	※比干	微子１	比干	第二等	11b04	※殷の三仁
85	※季桓子	微子４	季桓子	第九等	30b13	
86	楚狂接輿	微子５	楚狂接輿	第四等	33a04	
87	長沮	微子６	長沮	第四等	32b09	
88	桀溺	微子６	桀溺	第四等	32b12	
89	丈人以杖荷蓧	微子７	丈人	第四等	32b14	
90	※虞仲（仲雍）	微子８	中雍	第二等	11a10	※逸民

別表４　『論語』登場人物と人表掲載（『史記』仲尼弟子列傳所載以外）（続き）

No.	人物	初出	人表表記	等級	百衲本配置	備考
91	※夷逸	微子８	—	—	—	※逸民
92	※朱張	微子８	朱張	第二等	32b10	※逸民
93	※少連	微子８	少連	第二等	32b13	※逸民
94	※亞飯干	微子９	亞飯干	第三等	11b09	
95	※三飯繚	微子９	三飯繚	第三等	11b12	
96	※四飯缺	微子９	四飯缺	第三等	11b15	
97	※鼓方叔	微子９	鼓方叔	第三等	12a01	
98	※播鼗武	微子９	播鼗武	第三等	12a02	
99	※少師陽	微子９	少師陽	第三等	12a04	
100	※擊磬襄	微子９	擊磬襄	第三等	12a05	
101	※魯公（伯禽）	微子10	魯公伯禽	第四等	13a12	
102	※伯達	微子11	伯達	第四等	12a06	※周の八士
103	※伯适	微子11	伯适	第四等	12a07	※周の八士
104	※仲突	微子11	中突	第四等	12a10	※周の八士
105	※仲忽	微子11	中**𢘅**	第四等	12a11	※周の八士
106	※叔夜	微子11	叔夜	第四等	12a14	※周の八士
107	※叔夏	微子11	叔夏	第四等	12a15	※周の八士
108	※季隨	微子11	季隨	第四等	12b01	※周の八士
109	※季騧	微子11	季騧	第四等	12b02	※周の八士
110	※陽膚	子張19	陽膚	第五等	33a08	
111	※紂	子張20	辛	第九等	11b01	
112	衛公孫朝	子張22	衛公孫朝	第八等	33a04	
113	※叔孫武叔	子張23	叔孫武叔	第八等	33a02	

※人物中の「※」は、評価での言及など、直接登場しない人物。但し、当該章で評価される人物の行事を説明する上で登場する人物については除外した。
※「初出」は、その人物の『論語』における初出の篇・章を示す。

第三章　人表の「群」とその機能

人表を見るとき、孔子門下、および孔子をとりまく人物は、次の二つの群に集中していることがわかる。

①仲尼を筆頭とし、宰我・顔淵から顔刻・琴牢までの弟子を含む群（百衲本27ｂ09～29ａ14の列）。この中には、孔子十七歳のとき、孔子を聖人の後裔として師とするよう遺言した孟釐子と子の孟懿子、懿子とともに孔子に礼を学んだ南宮敬叔や、周で孔子が礼を問うた老子が含まれる（孔子世家）。

②葉公子高から顔柳までの群（同32ｂ10～33ｂ05の列）。孔子の遍歴期に折衝をもった、『論語』登場人物が多く含まれる。この中では顔柳（顔辛、字は子柳）が唯一の孔子門下であるが、『禮記』檀弓下に哀公の非礼を諫めた人物として見え、顔柳の前後の顔丁（善く喪に居ると称される）・周豊（哀公に禮義・忠信・誠慤を以て民に臨むよう述べる）も檀弓下に在ってともに第三等であるから、孔子門下としてより檀弓篇の関連人物（人表中に多く含まれる）としての位置づけかもしれない。

『論語』を誦読した者であれば、人表のこれら一群を目にしたとき、ただちに『論語』という典籍と、その人物たちの言葉や事績を想起するであろう。前掲吉本氏は、人表春秋部分の人物の排列を詳細に分析して、登場人物が『史記』に比して圧倒的に多く、多くの人物の背景には豊富な史実があって、その豊富さを『左傳』が支えていることを指摘した[9]。このことは『左傳』に止まらず、人表の堯舜の部分を見れば『尚書』の内容が想起され、文王（第一等）と大姒（第二等）が併置されている（12ａ11・12）のを見れば『詩』が想起されるということになる。すなわち、人表は、大まかな時間軸に、関連する人物を近接して載せ、「群」として示すことで、人物の羅列を超えて、人物にともなう事績や、人物について記した典籍をも表しているということになる。

この「群」による視覚的効果は、劉知幾の指摘に従って表をやめて等級ごとに配置したり、あるいは各人物の注釈を増して人物どうしが離れたりすると失われてしまう。事や書をも暗示するためには、最小限の注釈にとどめた人物一覧という人表の形式は、むしろ最適なものであると言えるのではないか。

第四章　『論語』の重視とその影響

さて、人表中の人物あるいは「群」の「出典」として顕著なものとしては、『尚書』・『左傳』・『論語』・『禮記』檀弓篇が挙げられる。『左傳』は紀事主体の書であり、『論語』には多くの弟子と周辺の人物、あるいは孔子が評した古の人物が収められるから、人表を企図した時点で、恣意的にこれらの人物を除かないかぎり、『左傳』・『論語』の要素が大きくなるのは自明である。これは班固自身が恐らく自覚していたであろうし[10]、多くの先行研究が指摘する劉向・劉歆父子の影響[11]が、その背景にはあるだろう。但し、人表が元序と掲載人物で『論語』を強調したことは、聖人孔子を冠するその書の価値観にも制約されることを意味する。

別表4を見ると、『論語』で孔子が、言動によって褒貶を表した人物は、基本的に人表の配等に反映されていると言えるだろう。そして、微子篇に集中する人物群も、「逸民」で不掲載の夷逸・柳下恵を除き、各章で列挙される全員がそれぞれ同じ位列で、人表に掲載されている。微子篇には隠者が多く見え、夙に老荘の影響が指摘されており[12]、特に、一章で、紂のもとを去った微子、佯狂して奴となった箕子、留まって諫をやめず殺された比干の「三仁」と、八章の伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・柳下恵（展禽）・少連の「逸民」のうち五名を（前述のとおり夷逸・柳下恵は不掲載）、ひとしく第二等仁人としたことで、乱世乱邦においては為政の場に止まることが必ずしも重視されず、隠者を高く評する傾向を生じている。人表には『論語』以外でも、楚君へ諫諍を続け、放逐されてなお楚を憂える屈原（38a09）と、その屈原に、濁世に順応した生き方を説いた漁父（38a13）とが第二等に並置されているのは、典型的な例であろう。

第五章　聖人の評価について

前掲した人表・元序には、九等評価の基準として、上智と下愚、中人（中中）という、最上位と最下位、中央について明示されている。中でも上三等については、別に聖・仁・智の規定があるから、人表の配等にあたっては、まず最上位の聖人に誰を充てるか、というよりも、諸書から容易に抽出される聖人「候補」のうち、どこまでを聖人とするかが、仁人以下の配等にも影響を与える焦点となったはずである。人表を読む者にとって

も、聖人の範疇は大きな注目点であるだろう。

現行の人表では、第一等聖人は、次の十四名である。

①太昊帝宓羲氏　②炎帝神農氏　③黄帝軒轅氏　④少昊帝金天氏　⑤顓頊帝高陽氏　⑥帝嚳高辛氏　⑦〔帝堯〕陶唐氏　⑧帝舜有虞氏　⑨帝禹夏后氏　⑩帝唐殷商氏　⑪文王周氏　⑫武王　⑬周公　⑭仲尼

『漢書』成書当時、聖人・聖王の内訳は未だ固定されていなかったと思われる。まず楚元王傳、劉向の成帝への上奏文（陵墓造営奢侈に対する諫奏）には、「唯陛下上覽明聖黄帝・堯・舜・禹・湯・文・武・周公・仲尼之制」の語が見え、王莽傳中の策命には、「帝王之道、相因而通、盛德之祚、百世享祀。予惟黄帝・帝少昊・帝顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜・帝夏禹・皋陶・伊尹咸有聖德」の語がある。

また、章帝の建初四年（七九年）に挙行された白虎観での議論を班固がまとめた『白虎通』の聖人篇では、「何以知帝王聖人也。易曰、「古者伏羲氏之王天下也」、「於是始作八卦」。又曰、「伏羲氏沒、神農氏作」、「神農沒、黄帝・堯・舜氏作」。文俱言「作」、明皆聖人也。論語曰、「聖乎堯舜、其由病諸。」」と、『易』（繫辭下傳・説卦傳）に基づいて伏羲・神農・黄帝・堯・舜を聖人とし、次に「何以言禹・湯聖人。論語曰、「巍巍乎舜、禹之有天下而不與焉。」」與舜比方巍巍、知禹・湯聖人。春秋傳曰、「湯以盛德、故放桀。」」と、『論語』・『春秋傳』（未詳）に基づいて禹・湯を聖人とし、次に「何以言文王・武王・周公皆聖人、詩曰、「文王受命。」非聖不能受命。易曰、「湯武革命、順乎天。」湯武與文王比方。孝經曰、「則周公其人也。」下言「夫聖人之德、又何以加於孝乎。」」と、『詩』（文王有聲）・『易』（「革」象傳）・『孝經』（聖治章）に基づいて文王・武王・周公を聖人とし、次に「何以言皋陶聖人也。以目篇曰、「若稽古皋陶」。聖人而能爲舜陳道。「朕言惠可底行。」又「旁施象刑維明」。」と、『尚書』皋陶謨に基づいて皋陶を聖人とし、また、「聖人未沒時、寧知其聖乎。曰、知之。論語曰、「太宰問子貢曰、夫子聖者歟。孔子曰、太宰知我乎。」」と、『論語』に基づいて孔子を聖人とする。

まとめると、人表以外の『漢書』の記述からは黄帝・少昊・顓頊・嚳・堯・舜・禹・湯・文王・武王・周公・孔子のほかに皋陶・伊尹が聖人として挙げられ、『白虎通』では伏羲・神農・黄帝・堯・舜・禹・湯・文王・武王・周公・孔子のほかにやはり皋陶が聖人とされている。このことは、聖人を三皇五帝、三代の始祖たちという「実際の帝王」に加えて周公・孔子に限定

する風潮は、当時まだ主流でなかったことを窺わせる。

第六章　人表の整理された聖人群が意味するもの

ここで、人表が掲げる聖人の最初の二人、「太昊帝宓羲氏」・「炎帝神農氏」について、『白虎通』の記述と比較してみる。『白虎通』號篇では、「三皇」について、伏羲・神農・燧人／伏羲・神農・祝融の二説を挙げる。人表では燧人・祝融を載せていない。また、五行篇では、東方の帝を太皡、神を句芒とし、南方の帝を炎帝、神を祝融とし、西方の帝を少皡、神を蓐收とし、北方の帝を顓頊、神を玄冥とし、土は中宮、その帝を黄帝、神を后土とする。人表では、宓羲（木徳）→神農（火徳）→黄帝（土徳）→少昊（金徳）→顓頊（水徳）という、非常に整理された交代図が示されているが、『白虎通』では、宓羲・神農は聖人とされているものの、太皡・炎帝に配当されてはいない。

一方、『漢書』はどうか。律暦志は、律・暦ともに劉歆を最も詳密とし、大半が劉歆の理論で構成されているが、篇末「世経」（上古より光武帝に至るまでの世系の変遷を記したもの）で、帝太昊を炮羲氏、炎帝を神農氏と結びつけている。

そもそも、世経は冒頭に、『春秋』昭公十七年経文「郯氏來朝」と、その『左傳』の記述を引いている。[13] 叔孫昭子が、少昊氏が鳥を以てその官に名づけた理由を問うたのに対し、郯氏が黄帝氏＝雲、炎帝氏＝火、共工氏＝水、太昊氏＝龍、少昊氏＝鳳という由縁を示したものであるが、劉歆はここから、太昊→共工→炎帝→黄帝→少昊という系譜を示し、さらに、『易』から、炮犧（宓羲／伏羲）→神農→黄帝の継承と、「炮犧氏之王天下也」（繫辞傳下）より、炮犧が天を継いで王たり、百王の先となり、徳を木より始めたと論を展開する。そして、太昊（木）→共工（水）→炎帝（火）の継承は序にかなっておらず、共工氏は水徳を具えていたが、知と刑とに任じていたために覇者であっても王者でないとして、水徳の秦が木徳の周、火徳の漢の間に在る（閏位）のと同じであるという論を導いている。[14]

つまり、人表が「太昊帝宓羲氏」より表を始め、共工を第二等仁人に止めて「炎帝神農氏」を第二の聖人とするのは、律暦志の世経の内容と完全に一致する。以降も、周公・孔子を除いて第一等聖人はすべて帝王に限定され、前漢末の劉向・王莽の言や、『白虎通』が「聖」と言及する皐陶・伊尹はともに第二等とされて、最後に秦始皇・項羽・陳勝・呉広らいずれも第六等とされる人物を中心とする秦・楚の「群」を以て終わる。しかし、聖人に注目して人表を見るとき、『漢書』に通じた者は

冒頭から律暦志との関連に気づき、宓羲氏から神農氏の継承に、火徳の帝・漢高祖の登場を想起するであろう。思うに、これは人表の意図の一つではないだろうか。

第七章　人表における六経・儒統の宣揚と藝文志との関係

ここで、人表における聖人を「すべて帝王に限定」した場合の例外である、周公・孔子について検討する。

まず、周公については、幼少の成王を輔けて摂政し、その成人後政を還したという、帝王の輔佐としての美徳が注目されるが、帝王の輔佐であれば第二等とされた皐陶・伊尹も同様であり、特に伊尹には、太甲が不明暴虐であったため、伊尹がこれを桐宮に追放して三年政を摂った（『史記』殷本紀）とされていたから、他の理由が追加されなければならないだろう。そこで想起されるのは、周官の制作者（『史記』魯周公世家）としての側面と、周公が、六経の祖述者である孔子とともに、儒家によって宣揚されてきた側面とである。

次に孔子については、ここまで述べてきたとおり、人表を見ればすぐに孔子と弟子たちの優遇は看て取れる。孔門以外の諸子を見ても、儒家では子思（『史記』孔子世家は中庸の制作を記す）・孟子・荀子（人表では「孫卿」）が第二等、孟子門下の公孫丑が第三等に配される一方で、他学派は、老子・墨翟をはじめ全員が第四等以下に配せられており、梁玉縄の指摘以来、人表の諸研究の多くが尊孔崇儒をその特徴に挙げている。また、子思（孔伋）は孔子の孫でもあり、孔子の血統としては、第二章に述べたように、孔子—子思—孔穿—孔鮒—孔襄の系譜がある。すなわち、人表では孔子の学統・血統は「仲尼」以来連綿と続き、「孔襄」へと至る。そして、漢人たる孔襄が人表最後を飾っていることは、帝王の系譜が高祖の登場を暗示すると仮定すると、同様に、儒の系譜が漢以降も絶えることなく続くことを暗示していることになるのではないか。

宓羲は八卦を作り、文王は周易を演べたとされた。『詩』『書』の中心は聖賢の言動である。人表所載の人物の多くは、六経とその伝（注釈）に『論語』・『孝經』を含めた、藝文志が六藝のカテゴリに含める経典に関わる。そこに孟子や孫卿らの儒家、さらに道・墨・法・兵・縦横家等の諸子も加わって、人表からは、六藝を頂点とする藝文志の典籍世界[15]も看取することができると言えよう。

○結語

『漢書』古今人表は、諸書を博捜して二千人に迫る人物を上上から下下までの九等に配した、他表と異質なものである。等を配することは人物への評価や褒貶をもたらすが、一々配等の根拠を示さないことは評価の妥当性への懐疑や批判を招き、また、九等もの列に多人数を配することは、伝写の際の脱誤を生じやすくさせた。

一方で、人表は人名のみの羅列でありながら、かえってその限定によって、人物の表記や選定、配置のしかた次第で、編者の意図を視覚的に暗示することが可能である。人表所載の人物は、大まかな時間軸に、関連する人物を近接して載せ、「群」として示されている。学問教養ある読み手ほど、人物の羅列のなかに、様々な意味づけの「群」を見つけ、かれらが残した事績や、記されている典籍篇章を想像することができる。

班固は叙伝で、「篇章 博挙し、上下を通じ、略ぼ名号を差して、九品を之れ叙す。古今人表第八を述ぶ。」と、意図と体裁を述べながら、『漢書』一百巻の中に人表を組みこんだ。班固自身が人表を構想どおりに完成させたのか、あるいは現行の人表が、『漢書』成書当時の姿をどこまで保っているかについては考察のしようがない。しかし、現行人表からは、『尚書』・『左傳』・『論語』の強調や、律暦志に基づく帝王の系譜、藝文志が表す六藝を頂点とする典籍世界を読み取ることができる。人表は孤立した異分子ではなく、他篇、特に律暦志・藝文志との強い関係性をもつものである。

人表が漢人を示していないという批判も、劉氏の世が続いていたなかで、皇帝家や功臣たちを配等する危険を、構想段階でも班固が想定しなかったとは思えない[16]。人物の記載を秦末に止めることは、班固の最初からの意図であっただろう。今を記さないことは、梁玉繩がいう「彰善戒悪、準古鑒今」のみならず、太昊帝宓羲氏から炎帝神農氏への継承を示すことで火徳の劉氏の登場を暗示し、孔子の系譜を連ね、最後に唯一の漢人孔襄を置くことで、儒統の永続を示すという、より積極的な効果をもたらしているのではないか。班固は、自身が織り込んだ数多の意図を読み解く「読者」を期待して、『漢書』を述べたはずである。その意図は、必ずや人表中にも、多く潜んでいるに違いない。

（注）

（1）張晏曰、「老子玄默、仲尼所師、雖不在聖、要爲大賢。文伯之母達於禮典、動爲聖人所歎、言爲後世所則。而在第四。田單以即墨孤城復強齊之大、魯連之博通、忽於榮利、蔺子申威秦王、退讓廉頗。乃在第五。大姬巫怪、好祭鬼神、陳人化之、國多淫祀。寺人孟子違於大雅、以保其身、既被宮刑、怨刺而作。乃在第三。嫪毐上烝、昏亂禮度、惡不忍聞。乃在第七。其餘差違紛錯不少、略舉揚較、以起失謬。獨馳騖於數千歲之中、旁觀諸子、事業未究、而尋遇竇氏之難、使之然乎。」

（2）師古曰、「但次古人、而不表今人者、其書未畢故也。」

（3）原文「既非國家遞襲、祿位相承、而亦複界重行、狹書細字、比於他表、殆非其類歟。」劉知幾が見た人表の体裁は不明だが、北宋景祐刊本（百衲本）『漢書』では、人表は九等の横軸だけでなく縦にも一行ごとに罫線が引かれ、人物は大字一マス二字ないし三字までで超過する者は改行し、原注や顔師古注は双行細字で記している。他の表に比べて確かに読みにくい。

（4）吉本道雅「『漢書』古今人表と春秋史」（京都大學文學部研究紀要第五十七号、一～六一頁、二〇一八年）。

（5）渡邉義浩「『漢書』における『尚書』の継承」（早稲田大学大学院文学研究科紀要、第一分冊第六十一巻、三～十七頁、二〇一五年）。

（6）この『白虎通』との相違の指摘は、侯外廬が、班固には国家の興亡を人為の得失に求める『史記』の立場を踏襲する側面と、五行志や『白虎通』の神学思想という両面性が見られ、これは班固が、後漢の讖緯思想の流行と、劉向・劉歆父子や揚雄らの影響によって「正宗的信心」を失い、「二重人格的折衷主義者」へと変貌したものであると批判している（『中國思想通史』第二巻「班固的庸俗思想及其人文思想」）ことを想起させる。

（7）人表及び『漢書』本文は、中華書局点校本二十四史に拠るが、別表での人表の配置については、縦の行にも罫線が引かれて便利なため、百衲本を用いた。

（8）『論語』については『儒藏』精華編一〇四（北京大学出版社、二〇〇七年）所載の『論語集解』（正平版を底本とする）に拠り、章分けもそれに従った。

（9）吉本氏前掲論文五一頁。

（10）人表では、孔子（仲尼）のあと、顔淵・宰我ら十哲を配する前に左丘明を第二等に置く。ここにも『左傳』の重視が暗示されているといえる。

（11）班固における劉向・劉歆の影響と研究史の整理については、渡邉義浩『後漢における「儒教國家」の成立』（汲古書院、二〇〇九年）を参照されたい。

（12）武内義雄『論語之研究』（岩波書店、一九三九年）第二章六「下論十篇中齊人所傳の論語七篇」および第五章五「季氏・陽貨・微子三篇に就いて」。

（13）「世經。春秋昭公十七年、郯子來朝。傳曰、昭子問少昊氏鳥名何故。對曰、吾祖也、我知之矣。昔者、黃帝氏以雲紀、故爲雲師而雲名。炎帝氏以火紀、故爲火師而火名。共工氏以水紀、故爲水師而水名。太昊氏以龍紀、故爲龍師而龍名。我高祖少昊摯之立也、鳳鳥適至。故紀於鳥、爲鳥師而鳥名。」

（14）漢火德説については、久野昇一『前漢末に漢火德説の称へられたる理由に就いて（上）・（下）』（『東洋學報』、上は第二十五巻三号、四一八～四五五頁、下は第二十五巻四号、五六七～五九九頁、ともに一九三八年）がそれまでの研究を整理しつつ自説を展開する。劉歆における漢火德説の創設と『左傳』の活用については、渡邉氏前掲書を参照されたい。

（15）このことは、藝文志が六藝より始まる点だけでなく、叙伝に示される

制作意図「虙羲畫卦、書契後作。虞夏商周、孔纂其業、篹書刪詩、綴禮正樂、彖系大易、因史立法。六學既登、遭世罔弘、群言紛亂、諸子相騰。秦人是滅、漢修其缺。劉向司籍、九流以別。爰著目錄、略序洪烈。述藝文志第十。」からもよく表れている。なお、汪春泓氏は、人表は屈原を第二等と高評価し、老子・荘子を低く評しているが、このことは、班固が道家の影響をも強く受け、「離騒序」で屈原の露才揚己を非難していることと符合せず、かつ人表の人物九等評価は『七略』の典籍分類と性質を同じくし、人表が法家に連なる荀子を第二等とし、商鞅・韓非の法家を第四等としているのも班固と相容れないとして、人表の制作者を藝文志と同じく劉向・劉歆父子であると主張する。筆者はこの主張ににわかに賛同しかねるが、人表の戦国期の人物選定と評価については、検討の余地があると思われ、稿を改めて論じたい。

（16）第一章参照。張晏や顔師古の指摘については、銭大昕が「予謂、今人不可表。表古人以爲今人之鑒、俾知貴賤止乎一時、賢否著乎萬世。失德者雖貴必黜、修善者雖賤必榮。後有作者、繼此而表之、雖百世可知也。觀孟堅序但云「究極經傳」「總備古今之略要」、初不云褒貶當代、則知此表首尾完具。小顔所云、蓋未喩孟堅之旨。」（『二十二史考異』巻六）と反論している。冒頭の「今人は表すべからず」に、言外ににじむ言論の不自由を見るべきである。

〈中文による『漢書』古今人表の主要研究〉

○丁毅華「《漢書・古今人表》識要」華中師範大学学報（哲学社会科学版）、一九八七年五期、五四～六〇頁
○王記録「《漢書・古今人表》撰述旨趣新探」山西師大学報（社会科学版）、第二三巻第二期、六七～七一頁、一九九六年
○朱輝峰「《漢書・古今人表》人物觀解析」湖北大学硕士学位論文、二〇一一年
○王緒福「《漢書・古今人表》研究——以西周以来所列人物為例」山東大学硕士学位論文、二〇一二年
○汪春泓「論《漢書・古今人表》与《漢書・芸文志》」中国古代文学理論学会第十八屆年会暨国際学術研討会論文集（哲学与人文科学）、三五九～三七一頁、二〇一三年

（附記）本論考は令和二年度國學院大學国内派遣研究の成果の一部である。